

退任あいさつ 浜田一義

合併から4年を経過した平成20年4月に市長に就任し、「合併したことで市役所は遠くなったけれど、合併して良かった」と言ってもらえるような市政を目指してスタートしました。

リーマンショック等に代表される不安定な経済状況に加え、全国平均よりも早く少子高齢化が進展する中で、市を存続させるための仕組みを作っていくことが重要と考え、まずは財政面、人材確保の面を中心に進めてまいりました。

財政面では、将来にわたって安定的な財源を確保するため、業務効率化、空き家等の民間施設も含めた既存施設の活用・廃止を中心としながらも、市民の利便性が向上するよう公共交通を「お太助ワゴン」等へ変換する等の工夫

をしながら、行財政改革を断行いたしました。

次に、人材確保の面においては、生産年齢人口が減少する中で、「男女共同参画社会」の推進だけでなく、他自治体に先駆けて「多文化共生社会」の推進を図るとともに、もやいの精神で市民同士が支えあう「共助」の精神を基礎とした「市民総ヘルパー構想」「生活支援員制度」を導入しました。

近年は、より明確に人口減少に歯止めをかけることを重点に進めてまいりました。「本市に住めば、「子育てがしやすい」「都会に負けない教育が受けられる」「仕事もできる」状況を作り出すため、光ファイバー網の整備に加え、「在宅育児世帯支援給付金」等の独自施策も実施してまいりました。その結果、平成30年度の人

口においては、合併以来、初めて社会増となりました。これは、これまでの人口減対策に対して、皆様の「協力のお陰」と深く感謝しております。

今後は、新市長のもと、融和と強調を基本に、市の基本理念である「人 輝く 安芸高田市」の実現に向けて、大きく発展することを願い、一市民として協力していきたいと思っております。

結びに、市長として3期12年、合併前の町長時代を含めますと5期20年の長きに渡り、トップとして行政運営を担うことができましたのも、市民の皆様をはじめ、市議会議員の皆様、職員の皆様の「協力があつてのこと」思っております。心よりお礼申し上げます。本市のさらなる繁栄を祈念し、退任のあいさついたします。



令和2年3月卒業

一元地域おこし協力隊

沖田政幸さん

3年間の歩みとこれからのこと

3月末で3年間の任期を終えた沖田さん。卒業後もこのまちで、家族とともに暮らします。任期中のこと、これからのことを聞きました。



心に残る体験を

既存の観光地に+α

商工観光課に配属され、田んぼアートプロジェクトに携わってきた沖田さん。1年目には田んぼアートのパイオニアとして知られる青森県の田舎館村の視察に参加し、2年目には田舎館村から持ち帰った苗8種類を試験栽培、そして3年目となる昨年は、たかたんを描いた田んぼアートを完成させました。「田んぼアートのいいところは、完成したアートの観光客を呼べることもひとつですが、田植えや稲刈りに参加してもらえるところだと思っています。市に暮らしても田植えをしたことがない人が多く、田んぼに入ったら大人も子ども、みんな心から楽しんでいました」と沖田さん。既存の観光資源に加え、こうした体験型の観光がこれからの市には必要だと考えています。

観光地ではない場所に

観光客を呼び込む民泊

並行して進めてきたプロジェクトがもうひとつあります。それが民泊事業。観光地ではない場所に観光客を呼び込むというこの取り組み。まず沖田さん自身がゲストハウスについて学び、民泊のルールなどを定めた住宅宿泊事業法の免許を市で初めて取得しました。農林水産省の農山漁村振興交付金を受け、プロジェクトを進めています。「国内外を問わず、何もしないために田舎を訪れ、住民と同じ生活を体験したいという旅行者が増えています。そうした旅行者を楽しませるだけでなく、人が訪れることでそこに暮らす人が喜んでくれることが何よりです」と沖田さん。「やっている人がハッピーでなければ続かない」というのが沖田さんのモットー。「自分の周りが幸せになれないのに

地域やまちのスケールをどうにかすることはできないでしょ?」。将来的には、6町に1軒ずつ個性的なプログラムが楽しめる面白い宿ができることを目指しています。

目指すこれからの観光の在り方とは

4月から、市の観光協会の職員として観光に携わる沖田さん。「東京で2回イベントを知らないという人がほとんど。この情報化社会にですよ!知られていないということとは大きなチャンスだと思っています。ありきたりの観光地に飽きた人たちのニーズが必ずある」と自信をのぞかせます。

これまでの、「観光地を巡る旅」から、「暮らしを体験し人に会いに行く旅」へ。沖田さんの目はしっかりと市の未来を見据えていました。